

講義録レポート

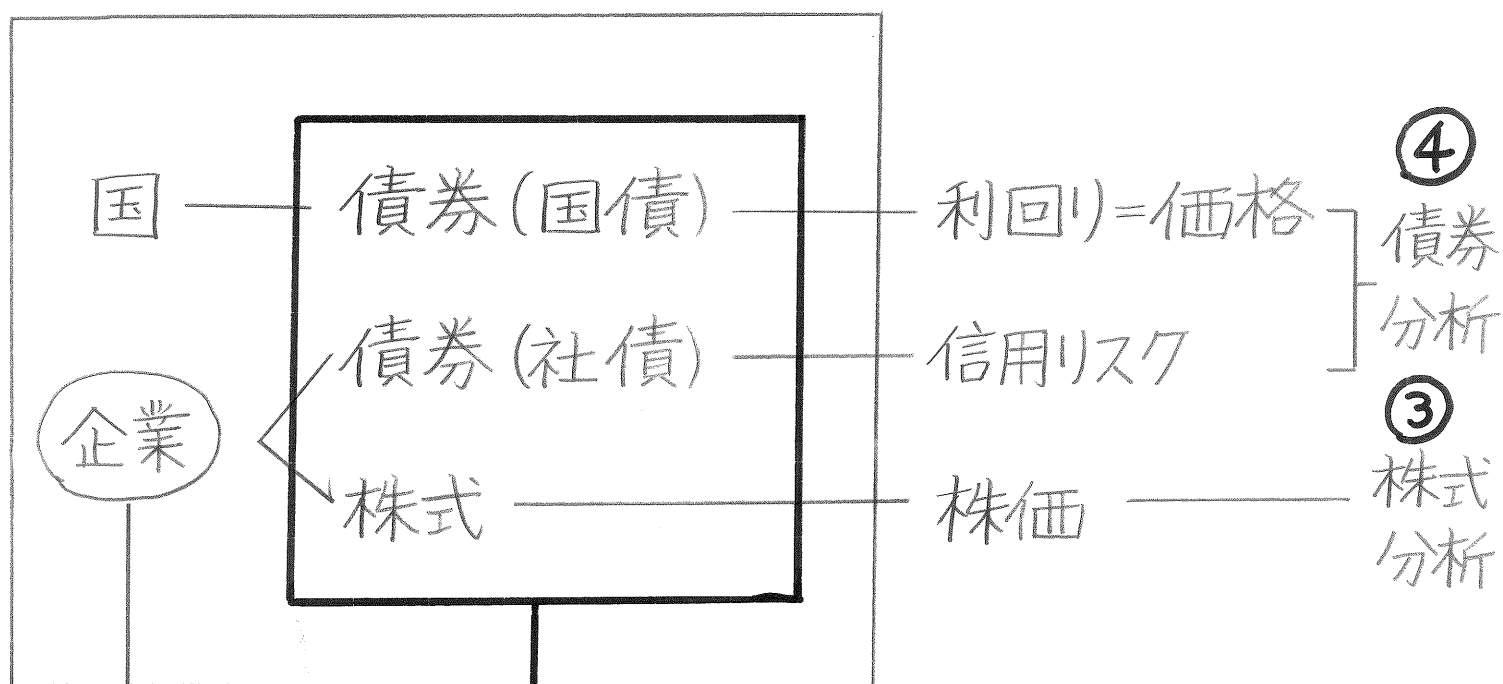
講 座	証券アナリスト	科目①	証券分析
目標年		科目②	
コース	1次秋試験向け 3科目横断実践セミナー	回 数	1 回
収録日	2015 年 5 月 20 日		
講師名	山岡 先生	講義録 枚数	3 枚 ※レポート 含まず
		補助資料 枚数	13 枚 ※表紙含む
講義構成	講義 (26) 分		
使用教材	①		
	②		
	③		
	④		
配布物	有 ☐ 無 ☒		
	①		
	②		
	③		
正誤表	有 ☐ 無 ☒	枚	
備考			

証券アナリスト	講義録	コース・講義等	3科目横断 実践セミナー	科目	証券分析	回数	
---------	-----	---------	-----------------	----	------	----	--

配布物	★テスト類： []	講師	山岡 先生
	★その他の配布物1： []		
	★その他の配布物2： []		

黒板内容

① 日本の証券市場 (制度・仕組み)



② ファンダメンタル分析 複数の資産の組み合わせ (株式・債券・金利など) ———— ⑥ ポートフォリオ
マネジメント

何らかの数値に基づいて価格形成

⑤ デリバティブ分析

証券アナリスト 講義録	コース・講義等	3科目横断 実践セミナー	科目	証券分析	回数	
-------------	---------	-----------------	----	------	----	--

配布物	★テスト類： [] ★その他の配布物1： [] ★その他の配布物2： []	講師	山岡 先生
-----	--	----	-------

黒板内容

本試験問題の構成 = 選択式 { 正誤問題(A~D 4択)
計算問題(A~E 5択)

第1問「日本の証券市場」= **正誤問題** 15問(15点)

第2問~第6問

セクション (I) (II) ~ (V)

↑
制度・理論など
正誤問題 中心

↑
計算問題中心 (電卓必須)

※ 配点…レジュメ P.2 参照

証券アナリスト	講義録	コース・講義等	3科目横断 実践セミナー	科目	証券分析	回数	

配布物	★ テ ス ト 類 :	[	]	講師	山岡	先生
	★ その他の配布物 1 :	[				
	★ その他の配布物 2 :	[				

黒板内容

基本的な概念

- 分散効果…⑥ポートフォリオ・マネジメント
- リターン
||
期待値

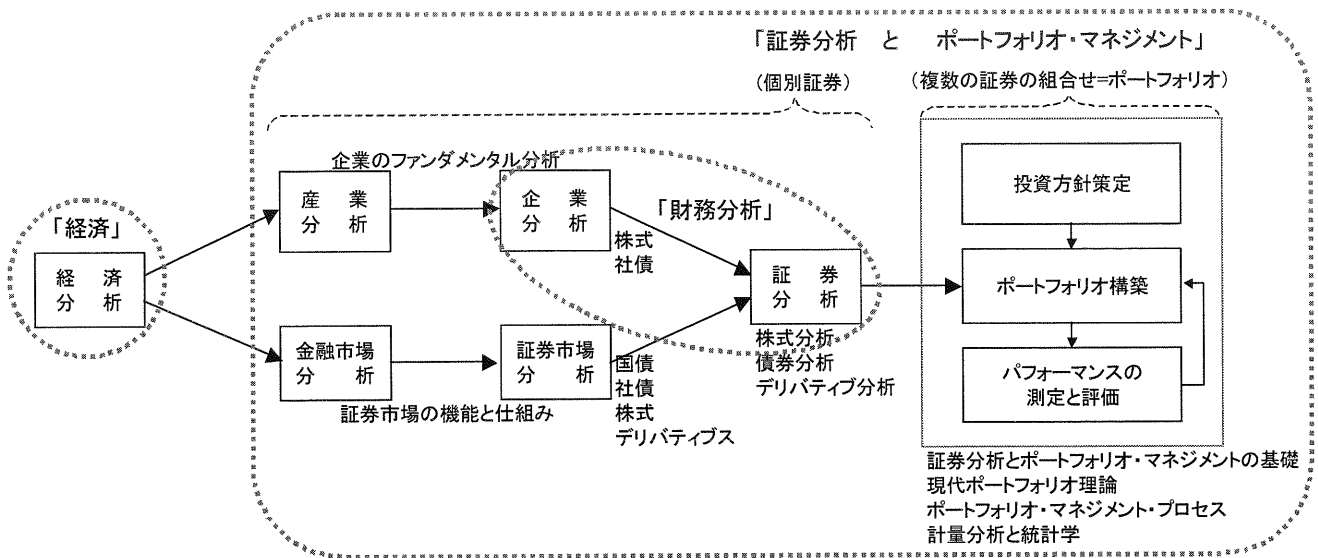
リスク
||
分散 or
標準偏差

基本統計量
(※ポートフォリオ
→相関係数)
- 現在価値…④債券分析 ③株式分析
⑤デリバティブ分析
- 無裁定 … ⑤デリバティブ分析

証券アナリスト試験・1次レベル
2015 年秋演習：科目別セミナー

－ 証券分析とポートフォリオ・マネジメント －

● 企業調査、証券分析～ポートフォリオ構築まで：アナリスト試験の内容との関係



● 証券分析とポートフォリオ・マネジメントの主な内容

(2014：協会通信テキストの配本)

- 1 証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎
(証券投資のリターンとリスク、リターンとリスクの計測、ポートフォリオ理論の基礎)
- 2 証券市場の機能と仕組み
(証券の種類、証券市場の仕組み、証券発行市場、証券流通市場、証券市場のプレイヤー：証券会社と機関投資家)
- 3 計量分析と統計学 (1)
(証券分析で使う数学、統計学の基礎、回帰分析とベータ)
- 4 現代ポートフォリオ理論
(投資家の選好、ポートフォリオ理論、CAPM、マルチファクター・モデルとAPT、リスクニュートラル・プライシング、市場の効率性)
- 5 企業のファンダメンタル分析 (産業分析と企業分析、主要な財務分析指標、主な企業分析手法)
- 6 株式分析 (配当割引モデル、株式価値算定の3つの等価アプローチ)
- 7 債券分析 (債券のキャッシュフローとその評価、様々な利回り概念、金利の期間構造、債券投資のリスク、信用リスクと格付け)
- 8 デリバティブ分析 (デリバティブとは、デリバティブの仕組みと価格形成、わが国のデリバティブ市場、投資戦略への応用)
- 9 ポートフォリオ・マネジメント・プロセス
(ポートフォリオ・マネジメント・プロセスの概要、アセット・アロケーション、マネジャー・ストラクチャー、個別証券ポートフォリオ、パフォーマンス測定と評価)

● 出題傾向（平成 26 年秋）

証券分析とポートフォリオ・マネジメント（大問 6 問，合計 99 問）180 分

問 題	分 野	内 容	理 論
第 1 問	日本の証券市場 (15 問：15 点)	証券市場の機能と仕組み	※制度など
第 2 問	企業のファンダメンタル分析 (16 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	財務分析
第 3 問	株式分析 (15 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値
第 4 問	債券分析 (18 問：35 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値
第 5 問	デリバティブ分析 (15 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値，無裁定
第 6 問	ポートフォリオ・マネジメント (20 問：40 点)	・基本統計量 ・ポートフォリオのリスク とリターン（分散効果） ・投資家の選好 ・パフォーマンス評価	現代ポートフォリ オ理論（MPT）

* 選択問題（正誤選択は四者（A~D）択一、計算問題は五者（A~E）択一：p.12 参照）

平成 25 年（秋）～平成 27 年（春）

問 題	分 野	平成 25 年 (秋)	平成 26 年 (春)	平成 26 年 (秋)	平成 27 年 (春)
第 1 問	日本の証券市場	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)
第 2 問	企業のファンダメンタル分析	16 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	16 問 (30 点)
第 3 問	株式分析	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)
第 4 問	債券分析	18 問 (35 点)	18 問 (35 点)	18 問 (35 点)	18 問 (35 点)
第 5 問	デリバティブ分析	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)
第 6 問	ポートフォリオ・マネジメント	20 問 (40 点)	20 問 (40 点)	20 問 (40 点)	20 問 (40 点)
合 計		99 問 (180 点)	98 問 (180 点)	98 問 (180 点)	99 問 (180 点)

- 全体で 100 問前後（ここ直近 4 回は 100 問割れ）・180 点満点
- 第 1 問は例年 15 問・15 点（各 1 点）
- 第 2 問～第 6 問は（Ⅰ）（Ⅱ）～（Ⅴ）といったセクションに分割

● 秋演習

(証券分析とポートフォリオ・マネジメント：全8回・前期実績・今期予定)

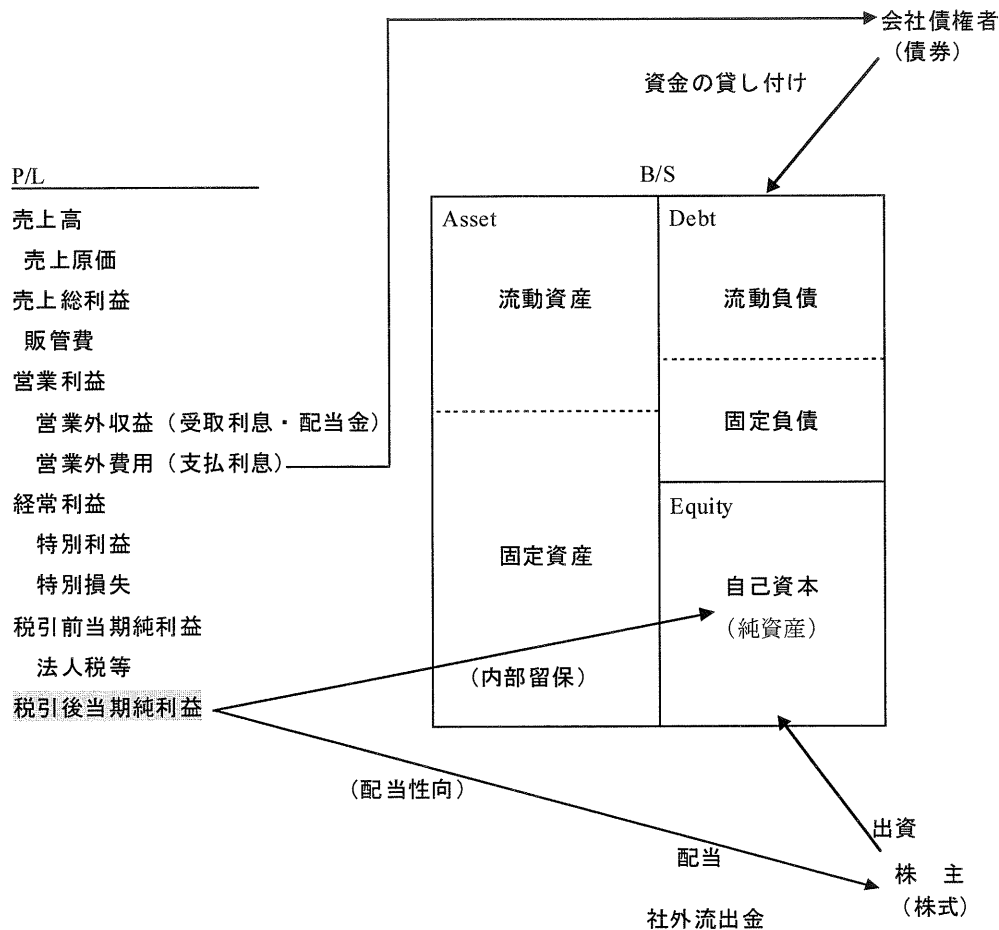
第1回	ポートフォリオ・マネジメント (第6問)
第2回	
第3回	債券分析 (第4問)
第4回	
第5回	ファンダメンタル分析 (第2問)
第6回	株式分析 (第3問)
第7回	デリバティブ分析 (第5問)
第8回	※ 証券市場の機能と仕組み (第1問)

※テキストは過去4回分(平成25年春・秋・平成26年春・秋)の本試験問題・協会解答
および弊社解説を収録した教材を使用します。

第 2 問：企業のファンダメンタル分析

第 3 問：株式分析

※) このあたりは「財務分析」と密接です



● 企業のファンダメンタル分析

収益性の分析

財務安全性の分析

キャッシュフロー分析

● 株式分析

株価指標

1 株当たり当期純利益 (EPS) ⇔ 株価収益率 (PER)

1 株当たり純資産 (BPS) ⇔ 株価純資産倍率 (PBR)

株式価値評価 (現在価値)

配当割引モデル、残余利益モデル、キャッシュフロー割引モデル

第6問：証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎（現代ポートフォリオ理論）

基本統計量

(1)リターン ①期待値(期待収益率)： $E[R]$	(2)リスク ②分散： σ^2 , $var(R)$ ③標準偏差： σ
	(3)2証券の関係 ④共分散： $Cov_{X,Y}$, $\sigma_{X,Y}$ ⑤相関係数： $\rho_{X,Y}$

(1) リターン

投資収益率 (R)

$$R_X = \frac{\overbrace{(\text{売却価格} - \text{購入価格})}^{\text{キャピタル・ゲイン}} + \overbrace{\text{配当金}}^{\text{インカム・ゲイン}}}{\text{購入価格}}$$

証券A

現在の株価	1年後	
	株価	配当金
1,000円	1,040円	20円

$$R_A = \frac{(1,040 - 1,000) + 20}{1,000} = \frac{1,060 - 1,000}{1,000} = 0.06 = 6\%$$

① 期待値

証券A（買おうか？）

今後1年間の景気見通しについて...

景気の状態	確率 (P)	各状況における投資収益率
好 況	30%	+15%
普 通	50%	+6%
不 況	20%	-15%
合 計	100%	???

$$\begin{aligned} ??? &= 0.3 \times (+15\%) + 0.5 \times (+6\%) + 0.2 \times (-15\%) \\ &= +4.5\% \\ &= E[R_A] \end{aligned}$$

証券Aの収益率の期待値（期待収益率）

期待値 $E[R_X]$: Expected Value

$$E[R_X] = \sum P_i R_{X,i}$$

このケースでは...

$$\begin{aligned} E[R_X] &= (P_{\text{好況}} \times R_{X,\text{好況}}) + (P_{\text{普通}} \times R_{X,\text{普通}}) + (P_{\text{不況}} \times R_{X,\text{不況}}) \\ &= (\text{各状況の起きる確率} \times \text{各状況における投資収益率}) \text{の合計} \end{aligned}$$

※ 「期待値」という用語は平均値とほぼ同義に用いられますが、データの平均は期待値と呼びません。

- 証券 A に加えて証券 B への投資を考えます。

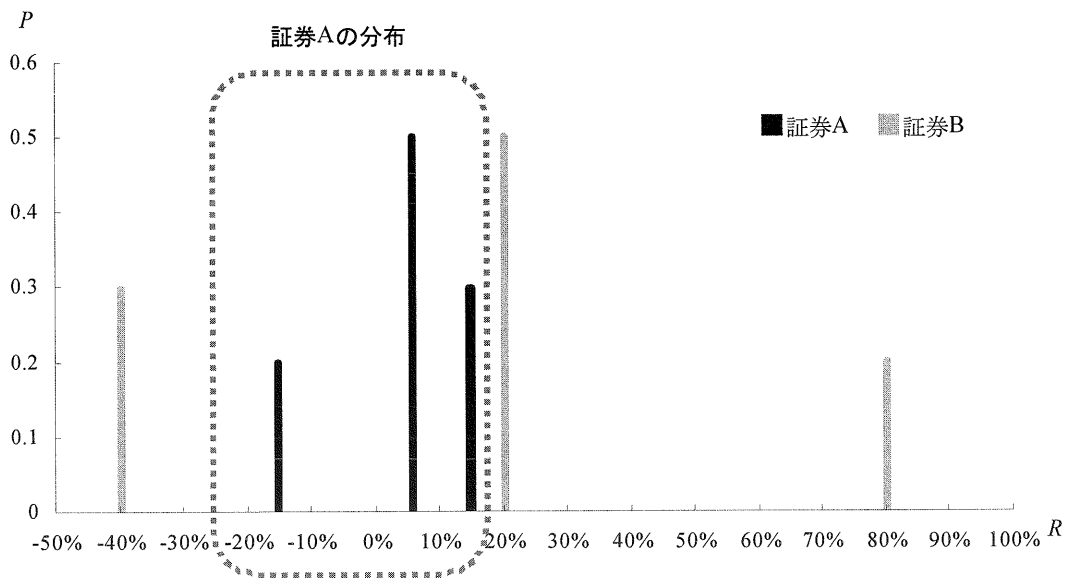
景気の状態	確率 (P)	各状況における投資収益率	
		証券 A	証券 B
好 況	30%	+15%	-40%
普 通	50%	+6%	+20%
不 況	20%	-15%	+80%
合 計	100%	+4.5%	$E[R_B]$

$$E[R_B] = 0.3 \times (-40\%) + 0.5 \times (+20\%) + 0.2 \times (+80\%) = +14\%$$

とりあえず。リターン(期待収益率)は証券 A よりも高いのですが...

(2) リスク

- 確率分布



証券Aと証券Bを比較してみると、グラフからは証券Bの方が分布のばらつきは大きそうな「感じ」がします (しませんか?)。

② 分散(期待値からのばらつき)

景気の状態	確率 (P)	証券 A	証券 B
好 況	30%	$0.3 \times (+0.15 - 0.045)^2$	$0.3 \times (-0.40 - 0.14)^2$
普 通	50%	$0.5 \times (+0.06 - 0.045)^2$	$0.5 \times (+0.20 - 0.14)^2$
不 況	20%	$0.2 \times (-0.15 - 0.045)^2$	$0.2 \times (+0.80 - 0.14)^2$
合 計	100%	=0.011025	=0.1764

証券 A の分散 $\sigma_A^2 = 0.3 \times (+0.15 - E[R_A])^2 + 0.5 \times (+0.06 - E[R_A])^2 + 0.2 \times (-0.15 - E[R_A])^2$
 $= 0.3 \times (+0.15 - 0.045)^2 + 0.5 \times (+0.06 - 0.045)^2 + 0.2 \times (-0.15 - 0.045)^2$
 $= 0.011025$

証券 B の分散 $\sigma_B^2 = 0.3 \times (-0.40 - E[R_B])^2 + 0.5 \times (+0.20 - E[R_B])^2 + 0.2 \times (+0.80 - E[R_B])^2$
 $= 0.3 \times (-0.40 - 0.14)^2 + 0.5 \times (+0.20 - 0.14)^2 + 0.2 \times (+0.80 - 0.14)^2$
 $= 0.1764$

分散 σ_X^2 , $var(R_X)$: variance

$$\sigma_X^2 = \sum P_i (R_{X,i} - E[R_X])^2$$

$$= E[(R_{X,i} - E[R_X])^2]$$

このケースでは...

$$\sigma_X^2 = P_{\text{好況}} \times (R_{X,\text{好況}} - E[R_X])^2 + P_{\text{普通}} \times (R_{X,\text{普通}} - E[R_X])^2 + P_{\text{不況}} \times (R_{X,\text{不況}} - E[R_X])^2$$

$$= \left[\text{各状況の起きる確率} \times \underbrace{(\text{各状況における投資収益率} - \text{期待収益率})^2}_{\text{偏 差}} \right] \text{の合計}$$

③ 標準偏差

ばらつき具合を表す統計量として分散の平方根をとったものを確率変数 x の標準偏差 (standard deviation) といい、 σ_x などで表します。

$$\begin{aligned}\text{証券 A の標準偏差} \quad \sigma_A &= \sqrt{0.011025} \\ &= 0.105 \\ &= 10.5\%\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\text{証券 B の標準偏差} \quad \sigma_B &= \sqrt{0.1764} \\ &= 0.42 \\ &= 42\%\end{aligned}$$

標準偏差 σ_x : standard deviation

$$\sigma_x = \sqrt{\text{var}(R_x)}$$

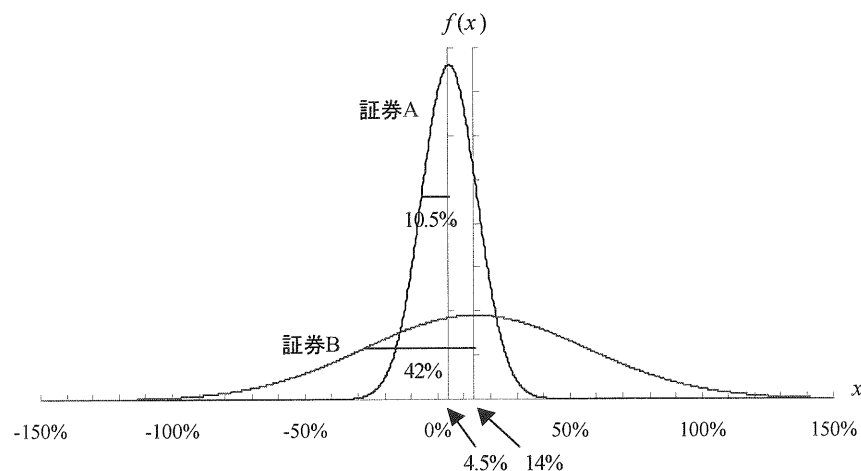
一般的に、ポートフォリオ理論で「リスク」と言った場合、この収益率の標準偏差を指します。

以上のことから、リターン（期待収益率）は証券 A よりも証券 B の方が高いのですが、同時に、リスク（収益率の標準偏差）も証券 A よりも証券 B の方が高いことがわかります。つまり、証券 A と証券 B を比べてみると、証券 A はローリスク・ローリターン、証券 B はハイリスク・ハイリターンということがわかります。

● 正規分布

証券 A と証券 B の収益率が正規分布に従うと仮定すると以下のようにになります。

	期待収益率	標準偏差
証券 A	4.5%	10.5%
証券 B	14.0%	42.0%

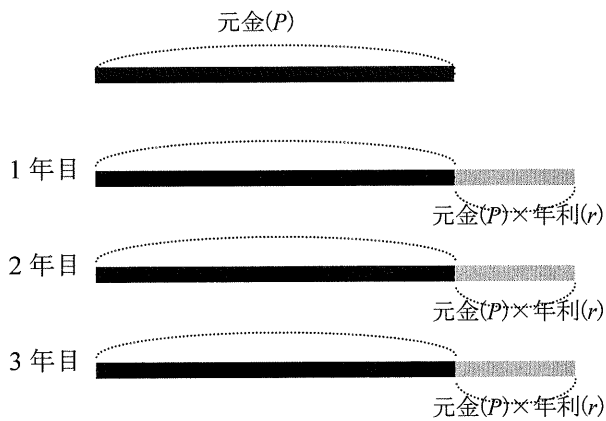


第4問：債券分析

■ 投資の基礎概念

1. 単利と複利

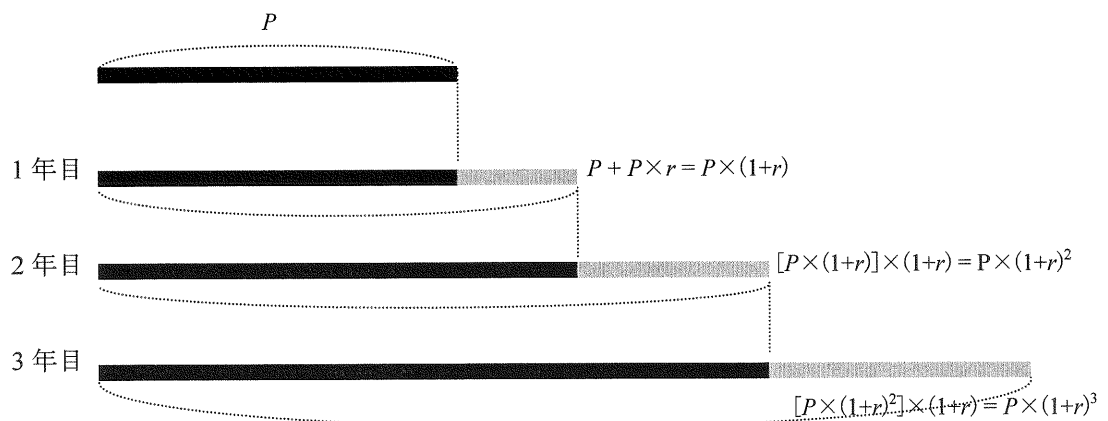
(1) 単利：元金（元本）のみが生む利息 → 利息に対する利息（再投資収益）を考慮しない



$$3 \text{ 年目の元利合計} : P + 3 \times (P \times r) = P \times (1 + 3r)$$

$$n \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + nr)$$

(2) 複利：利息を元金(元本)に加えて次の期間の利息を計算 → 再投資収益を考慮する

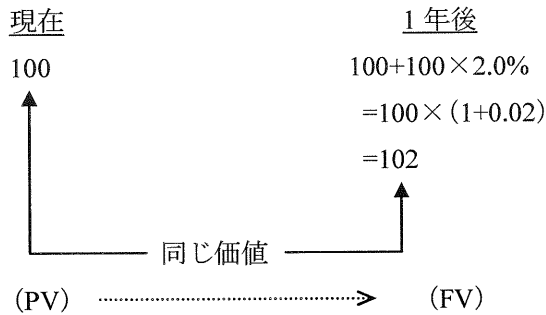


$$3 \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + r)^3$$

$$n \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + r)^n$$

2. 現在価値 (PV; Present Value) と将来価値 (FV; Future Value)

現在:100 円 (B/K 利率 r : 年 2.0%)

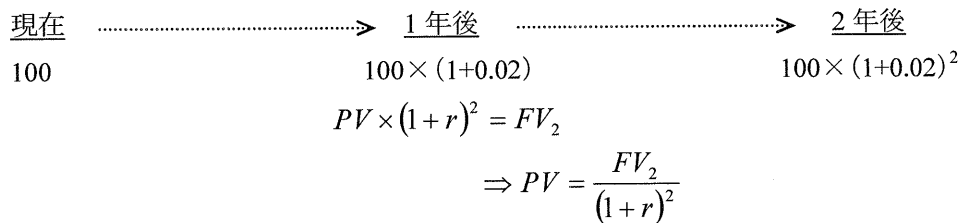


現在価値 $PV \times (1 + \text{利率}) = 1$ 年後の将来価値 FV_1

$$PV \times (1 + r) = FV_1$$

$$\Rightarrow PV = \frac{FV_1}{1 + r}$$

2 年に拡張



n 年に一般化

$$PV = \frac{FV_n}{(1 + r)^n}$$

$$= \frac{1}{(1 + r)^n} \times FV_n$$

Discount Factor (割引係数)

PV : 現在価値, FV_n : n 年後の将来価値, r : 割引率

3. 内部収益率 (IRR; Internal Rate of Return)

- ・ 今、10,000 円投資すると 2 年後に元利合計で 10,404 円戻ってくる
- ・ この投資案件の 1 年当たりの平均投資収益率は...

$$10,000 = \frac{10,404}{(1 + r)^2} \quad (1 + r)^2 = \frac{10,404}{10,000}$$

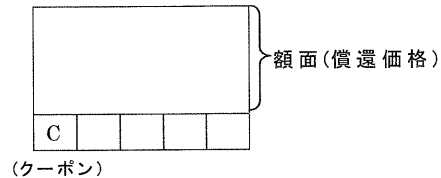
$$r = \sqrt{\frac{10,404}{10,000}} - 1$$

$$= 0.02$$

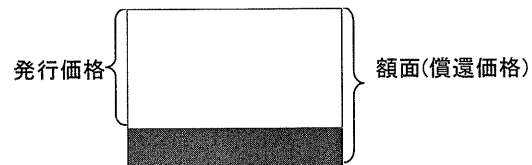
■ 債券

(1) 債券の種類

利付債（クーポン債）：発行後に定期的に**クーポン**（利金）の支払いがある



割引債（ゼロクーポン債）：額面（償還価格）よりも低い価格に割引いて発行される



(2) 利回りの計算

利率：クーポン・レート（額面に対する利金の割合）

例) 額面：100 円
年利率：5% ⇒ 年 5 円のクーポン

利回り：1 年当たりの投資収益率（*同じレートで再投資可能と仮定）

債券の収益（3 つ）： ①利息収入（クーポン収入）
②クーポンの再投資収益
③償還差益

●複利最終利回り（ytm ; yield to maturity）

- ・ クーポンの再投資収益を考慮する（同じレート r で再投資）← *実はかなり無理な仮定
- ・ 満期(maturity)まで保有
⇒ 投資元本に対して年率何%の収益を生み出したか？

■ 債券価格と複利最終利回り（ytm ; yield to maturity）

- ・ 利付債（年 1 回転化の複利計算 p.a.: per-annual）

$$P = \frac{C}{1+r} + \frac{C}{(1+r)^2} + \cdots + \frac{C}{(1+r)^n} + \frac{F}{(1+r)^n}$$

$$= \sum_{t=1}^n \frac{C}{(1+r)^t} + \frac{F}{(1+r)^n}$$

- ・ 割引債

$$P = \frac{F}{(1+r)^n}$$

P ：債券価格、 C ：クーポン額、 F ：償還価格、 r ：複利最終利回り、 n ：残存年数。

(ご参考) TAC 公開模試より

2013 年秋試験対策

第 4 問 (35 点)

I 債券分析に関する次の文章を読み、以下の問 1 から問 6 の各問に対する答えとして最も適切なものを A～D (ないし E) の中から 1 つ選んで、答案用紙の該当箇所をマークしなさい。

問 1 債券の利回りに関する次の記述のうち、正しくないものはどれですか。

- A 利付債の価格が額面と等しいとき、その債券の最終利回りとクーポン・レートは等しい。
- B 1 年後の最終利回りが現時点の最終利回りと等しいとき、1 年間の所有期間利回りは最終利回りと等しい。
- C アンダーパーの利付債は、複利最終利回りが直接利回りより高い。
- D オーバーパーの利付債は、クーポン・レートが最終利回りより低い。

解答：D

2011 年秋試験対策

第 6 問 (40 点)

V ポートフォリオ・マネジメントに関する次の文章を読み、以下の問 1 から問 4 の答えとして最も適切なものを A～E の中から 1 つ選んで、答案用紙の該当箇所をマークしなさい。

各資産のリターンの期待値、標準偏差は図表の通りである。

図表 1 証券 X、証券 Y、安全資産の特徴

	期待値	標準偏差
証券 X	12%	18%
証券 Y	18%	30%
安全資産	2%	0%

(注) 期待値と標準偏差は年率。証券 X と証券 Y のリターンの相関係数は 0.3。

問 1 証券 X を 40%、証券 Y を 60% 組入れたポートフォリオのリターンの標準偏差はいくらですか。

- A 9.7%
- B 12.8%
- C 16.2%
- D 18.4%
- E 21.3%

解答：E